年寄考俠客傳

第壹集

弐

へ 18
1245
2

門へ 13
號 1245
卷 2

開卷驚奇俠客傳第壹集卷之二

東都　曲亭主人編次

第三回　黒夜を照して螢火海濱ゐ道ずく　明察ゐ誇りて鼠輩恥辱を被ふ

却説野上史著演い後門前ゐ立出て。小六丸ゐ對面し。莊客們と急と。そぶ俠ゐ英直ぐ。柩と宿所と迎客れて。且客房と處とを。登時母屋小六丸も倶ゐ柩の後方ゐ跟ぶく。躯と客房ゐ赴く程ゐ。著演の妻晩稻。なほ凶服ゐ更て。這所ゐ俠てを。母屋小六丸ゐ對面して哀戚の涙を拭ひあへど。遠く他郷ゐ旅宿して。父を喪ひ良人ゐ後且つ悼て然てそと正首ゐ。舒く勸て慰れば。母屋にけり。小六丸も。ゐまゐ。主人夫婦の恁丁寧ゐ。歎待態ゐ且感て。且ちち歎ぶく。姑くゐ応も。なせば。繋ぬ舟の楫を絶て。あとゝ。とゝるべの磯鳥ゐく音と共ゐ。人後までの親子のうへを。憑ぶけ。恁て程ゐ著

演い英直の柩を早く送り来ぬる轎夫们ふ酒價ふ銭を取るをどと筬輿共倡ふ返し遣し却出居の北のく窮る一室を猛可ふ搔帚して机安二脚を上座ふ推並て登ふ考柩を這首ふ移さて屏風をとて亮楠子とその餘も三方を隔遠らしたる立則安ふも櫺を立香を焼くるを向の飯の准備も敷ひ誘とて母屋と小六丸を弁一点して拜さーめ次ふ著演立替さ找向ふ合掌し心の中ふ念ずる。維俺未見の兄弟館生尚灵ゐとび著演ゞ只今報るよりを聽ね某弱冠の昔より惟爭愛を旨として人の危窮を救ふとへども位高く富栄て民の父母なるめるるねばそを九牛の一毛のを並ぶ人ふ施ふ由るく虎名徒ふ年を歴て徳の菲薄を羞ぢ豈思ひんや和殿ふ知られてその妻とを託せるふ迺空翰を以て未亡の人母屋をふ向ふ生ふ異姓の兄弟なる義をもせ四く竊ふ推量るふ紙中ふ一字も写されざるーい千方言ゆるほ優で人を知りる意味深るるれば唐山の常言ゆゆ女子ハ已を知るの為ふ勉て貌ら男子ハ已を知るの為ふ必死るとへの某既ふ和殿を知られてかくの如ク送託ゆ。ゆゆ死力を盡ずて添貢這奇偶のとるを和殿ハ則新田の類族脇屋次將の家臣なるべ俺大父野上目ハ贈中納言義貞卿の鎌倉攻ふ従ひ元弘ふ功ありーのを料らず又這舊縁ゆ何ぞ一時の値偶るんを陰鬼陽人異るれも柩を留めて義を結び忘ふ異姓の兄弟たるべけふ總麻九十日るの服を禀て戚々の情を盡べ。住れば内室令郎のうへを萬事ふ後やまりて人妹とるの俺兄とるひ。教るふ師を擇を禍を避け侮りを御ぶて人とるさまく欲ふ某天性不幸ふ。齢半白ふ近るを絶く一個も嗣ゆゆ。小六ゞ成長を俟て俺這荘園を譲て俱ふ祀を受ん是某ゞ情願を微言誠を示ふ足らぬ衷情述るふ餘るゆ。即使香華の清奠を薦めて旅魂を迎るを尚く鄉餐ゆ。弥陀仏々々と唱れい晩稲ふ良人の後方ふ侍りて念誦ふ時を穀けり緒果を野上夫婦ハ母屋小六丸ふ飯を羞めて旅宿の艱苦を向慰めと懇切ふ管待を程ふ支

梅玉堂印發

ヨヌけれ茎茎茎長に日ごろ果敢なく暮れて又夕餐と雀やうる美味に一種ふしく精
進ふあるを用ひられる母屋今宵も枢を戍る明さんとおけると著演ずて頭をうち悼りあん
別に急人の病中ろ睡げうける疲労もあり俺们夫婦ふる任と息子と倶ふ這次の間へ
快退ぞく就寝臥簟も儲てもうんぞとふを母屋い推へ七そを辱く伏れお非如幾夜丈
睡らぎとも一生涯の別れ惜まぞ疲労を敷ふぞと固辞むを晩稲も共ふ諫めれるろ
さへ然ることを他人ふ任せふ俺们夫婦ぞ徒て伏れば今宵ふ睡らせも疲労を
増て病発ら後の憂ひを慮せ又よみぎろ愛まるもの子の為ふ伏ぞ多の這首ふ
ものを程ふ小六刀祢も就寝ぬ快々休らぬれと夫婦齊一論なるその言親切あければ
母屋ふ竟ふ推辞難で小六丸と共伯ふ告別ふ退ぞく枕ふ就ふけ然程ふ小六丸ふ
睡らんとまるふ伏れど獨熟思ふ俺父の亡骸ふ野上の角の資を流れ莽莽の心苦ろ
胸朽ぞくも悲ふ親の主君と考えるを右少将の首級を由比の濱遣ふ梟られるを終

ふ犬島の腹を肥やもうん痛まけれ俺假名川の宿ふ在り時那旅客们の噂ふ
六日已前のうるけれふ首級ふ今も那濱遣ふそあるんぞも今宵那首ふ潜ひ
ぞく奪取ふて還りそ鍋ふ大人の柩の内ふ敛めそ莽莽ふ亦亡親の
志を継ぞく做ふあるとのふ俺豫ふ是なるの所行を志あるそのそけふ假名川ふ
来つる輪丈们ふ問試ぞく鎌倉路を粗あれ這首を距る遠くもあらねば島夜とも迷ん
や嗚呼仆ふと肚裏ふ決めつ快れも甲夜の程ふ外見ありそ出ふ便の宜ふ我ば且
く時を移さぞ既ふ人定の母屋ふ疲労れく熟睡やあけ白上の間ふ主人の妻の咲を
罕ふ考えけ小六丸ふ折そよけれ横揺遣ふ身を起そ枕遣ふ措うる小刀と合そ腰ふ
跨ふ燈火をうち滅そ搔捞ふ潜びぞ縁頬ふ遣戸の末を半開ふて庭口ふ後
門のふ赴くふ奴婢们ふ甲夜の遽ふ紛れや忘れん幸ひふ角門のまぞ鎖ぞあり
けれ密と推開て走出ふ五月の天の癖ふれば降ふぞ定めるを如法闇夜ふ辿るも

鄉關を望み心當ふ鎌倉を投て急げども人家離れて田ふ畔ふ岐道さふヨろれが去向い右
欲左欲と思ひ難ん停在すせん術もなく彷徨く叢蔭より忽然と許ヨの螢群飛て小
六丸の身邊ふ來り路を照らし先ふ進て這身の為ふ鄉道を做さ欲とえて奇なる車
亂ぶ夜学の燈火ふ易ふ紀とふ故支ふ人作ふ自然まあらぶ此ふ是童子の忠孝を神明佛
陀の相憐まて恁る冥助を錫ひ給ふ小六丸ハ今ふの奇特ふ感歎ん此も礙身ふ螢の進む
從ひて只管ふ支る程ふ今いふ坂東路六町一里十五六里ふも及ばられ思ふ比果して田比の濱ふ
來ふけり。ふの時迄ふ許ヨの螢いふの四下を去らぶと雖も隈なく照せ共ふ小六丸ハ怡悅ふ勝
ぎ窟ふ四下とうろつくふ義隆主從六個の首級ハ梟て小塘隄の上ふ在り淺ち紀とふぶらも
あらねど猶豫せば遂ふ成卒ふ知られやまうんと思ふ傍の樗樹の枝ふ攜りて走り陟る
又よく視るふ主從の姓名ハ撰る牌ふ云云と紛れあるべうもあらぶれば今ハ初て死顔を
実の父へと神ふ身の知るよりわれも自然と備ふ孝子の忠勇義隆の首級ハ杠

抱紀樹下へそゞ伏撞と降ぶ程ふ這濱ふ苫屋ふ夜と成ふ乞児ハ件の
鄉言ふ駭覺ひ癖者ありと呼ぶて垂る延戸拂ふ突ひ出ん西三人ふ棒を引
提ぶ走り出ん佶とえれハ浦風和る夏の夜の四下ふ群飛ぶ百千の螢火の光りふ薪樵ふ
鎌倉山の名ふ孝星月夜より鮮明とこれを今宵の一奇事ふ怪むべ一個の童子ハ
義隆の首級を本事ふ走去んとけるを他逃ぶと呼ぶて先ふ進ぶ一個の乞児ハ食しる
棒を振内と駭る倒さんとて走る蒐ふ小六丸ハ快ふ脫れ出ぶ左ふ首
級を取る所ふ右ふ小刀を引拔ぶて受流し砍拂ひて防戰ふ程もあらぶ跡より進む両
個の乞児ハ左右ふ一捕篭て競ハ蒐ふ勢ひふ負ふも怯まぬ小六丸ハ勇敢とハいふも九才の
小腕ふ拄ぶ支ぶ最も危くええ方ける浩処ふ一個の武士の夜行衣裳ふ兜頭ふ面を
ふ小塘隄の蔭より顯れ出ん合ふる潛行蕉灯を投棄ん走蒐り小六丸の左右より
駭ふと進む一個の乞児の項髮抓ん引着ん足を飛と礙と躓る躓られと乞児ハ身を空さるふ

有像第四

たまたまこれをこちらや
ちいのをそうところあやぎそうぐ
由比濱小六奪首級
其のちとけくうん
小六丸

行手なる濱邉の石に膃を打て吐嗟とばかり叫びもあへず仆れけり程もあらせず又一人の利手を補て引迯らんと肩に引掛て投しが三間許怪飛て己が拿る桿棒にて頤を拂ひ苦と叫ぶ声は汀渚の友鵆立る浪に仰反て沙石に塗れて捧れて先に進みし一個の乞兒は今此の縡の光景に駭怕れ度を失ひて迯んとするを小六丸ははなさじと透さず踵入て閃めかしたる刀の冴に乞兒は首を斬落されて軀は後に倒れたり怖りし程に件の武士に投悩されし両個の乞兒は苦痛を忍び身を起して組んと進むを件の武士は又推隔左右なる両個の乞首捉禁て操返し復投居て推累ねつゝ其背の上に膝折布て動かせざりければ援を得たる小六丸は佗とも走りよらんとしてけるを件の武士は手を抗て這首領はざに快く殺さと推禁めたる好意の一言主を誰とも知らず浪の寄せては返す真沙路に迹を埋めて鉄びを述る胸さへ磯松原の樹の際立潜き故来し方へかへる鼻中月の雨催ひ有たる蛍は見えざるかて雲の絶間に洩る星の路の宿潦に映りし光景を栞に急ぎける。

然程に小六丸は好もあれ別ぬ暗き夜を足に信して走りつ稍踰越きて来にけれは時暗路方にべし笛篳の音猛然と吹暢して首級竊みし乞兒を逃すなと罵る諸声騒しく土兵幾人欲あらん蕉火振照して赶来れ既に急き小六丸は這形勢をみるなからに虎れ腮を逃れても蛇の口を入れは其儘にてあるべき狗死せば右少将の首級を取り復されてのみなるらで毋れの歎きも痛まし猶且恩人野上の公羽を連係せられてとあるべきぞ仇をも報ふに似ず今こそ追兵も近着ともまた只時運を天に任して脱れんものぞと尋思をして心むろりは急げども投く往方は野干玉の鳥夜にしあれば瞽者の杖は離れたるに似たると覚えて歩の運びの果敢らぬ後に逼は雑兵们が見あかしたる手々の電光御諚ぞと呼わるぞ撻を撻せず身を淪して閃りと避る小六丸は一期の危窮に心迷ひて前面なる小川のおちを覚えず登時追捕の雑兵等赶攎て耶と声を被て復撻りて手を小六丸は背に受て快走る勢ひ臼を輾を如くされもあらぞ件の小川へ忽地水へと陥りて吐嗟と叫ぶ

玉藻
声と共に愕然として驚き覚めば是なん南柯の夢にぞありける。小六丸は覚ての後も胸うち騒ぎて安らぐ心を鎮め頭を擡げて彼此とそこなふ身くるふ甲夜の伏ふしと母の側に臥て在り。

はなぐと思惟るに俺豫ねて右少将のおん首級のゐ心ふかくまそ大隼ひ取ぞやと思ひ入れたるとなるに轎夫们は鎌倉路を向ーてあるそも這度の為ふく比は初旬の烏夜なれば潛ぶに便りよかりのなり。不知案内の夜行るふ逆その准備もなく不覚ふ出て過失あらば本意を遂ぬのみなら這身を其処ふ喪ふべしと得ふ陷むともあれば必ず果さぐ必ず寝の労頭ふよりて恁まぐぶ奇ーなる夢きへたーゆやあらん然るにも夢の中ふ俺を援け一那武士を誰と知るよりなりーなども語音は野上の翁ふ似たる件の翁は往る年戦死の髑髏一萬餘級を聚合て葬ひ弔ふとふ義氣任侠の趣を偽ぎるなりもあれば右少将のおん首級を隠さんと欲ーる同氣同憂俺夢に入りて幻ゑえる歟倘かるふ俺意中を告ーて資ふ做ぎるぐれふ優る後貧あらんや然とく果敢るに夢を憑ぎて。

明々地ふ譚ひぐ。のふ志ぐ。ふ難く。深念ふ時を移ぞあぐ。遊行寺の鐘枕ふ響音ぐく窓よりあらむ夏の夜の明くとそ島の屋鳴けば母屋ぢくふ小六丸も起出つ涼ぐく。躰と枢の頭ふ凭ぐく。主人夫婦は昨夕の通夜の疲労さをと同慰ぐ夫婦は且くうち譚ふく。辞と便室ふ退ぐける。登時小六丸は母親と共侶ふ香を焼水を向く枢を拝ぎるぐるの中ふ昨夜夢ぎ趣を告ーて冥助を黙禱ー頭を擡てうらぐ視れぐのふまぐなりとおぐぐる枢の上ふ置れしのあり白布の大袱そ下無るぐ覆また れば何ゆあらんと訝るぐ人のやまるとと影護さふうちも披ぐぐありけるふ母屋を浄ぶふ立まけり。奴婢们は亦朝の炊ぐの遽ぐ紛れてやまぐ基を看るのもなけれぐ小六丸は這図ふとぐふ心の慌ぐく。枢の後へ立寄ぐそ。密と袱を掻揚ぐれば水三ぐ拝装べりける。六箇の小瓶をうち黒ぐて。枢の上ふ惜れ。訝ーぐとうべうもあれば上ぐる一隻を食卸ーて。蓋を推開ぐ。それぐ人の斬首ぐ。その面影ふ夢ふんなりー。脇屋右

少將が肩こりけりあを什麼いふとぐろふ駭嘆七日くらうもろ。送れる五箇の瓶もみな。一箇々々まその内をえれば亦是首級。此彼夢想と暗合の奇特は感ずるまでの神童。六箇の小瓶を故のごと。柩ふのごとく遽く又秋どうち被て退れ坐しとあるを事の情を察まるふ件の小瓶の内るい脇屋少将主従の首級なりと疑ひ。あるふ昨夜あるどの翁いふ。ろ那処ふ赴くとの陰徳を做ーろ狹然ーまい腹心のものとりて竊ふ奪取せーあるんあるとも亦俺親の為ふせれ忠信智略公翁いふ義士ろうる恁と知らべ俺も亦共侶ふ左ゆくべうーふ恨る所い俺年才のまぐ千ふ足らぬれい孤疑と昨夜潜びも出徒ふ暁せー悔ーゆくまうれども魂のあくがれ出ずとの期ふ遇ひい知らでもあるに俺宿念の虚ーゆくとのふべるのを和漢ろうるべく儔平ろう良善の翁と微笑義を結びくロ弟ともあるりあひくるい俺父も亦凡人ろ。身後まで餘情深ふを現有ぶべ死交りやとを過去ーかをへ想像る嘆賞あまりて胸そ吾ーに感涙の外ろうるり浩

処ふ著演い走りく便室とるふそ東西のひに死とひて躯処ふ著演い走りく便室とるふそ東西のひに死とひて躯件の小瓶をとそ身を牆ふとひとるふ寄せ那秋の被ーー随ふ推果ーを毎も肩ふ引攫と走りく便室ふを退りけ。當下母屋い浄ゆるとく。衣の裾り緑頬ろ来ー障子の裡面ふ入ーと小六ゆと等着ゆ目今あるーー緯の趣并ふ昨夜見ー夢の為体と具に示ーて。憶ふる六箇の小瓶ふ斂れーい主の翁ゆ俺父の為ふ竊ふ隠ーる右少将主従の首級ふそあるーらゆ俺身も亦豫ふるその計校ふあるるーく不知案内のとゆ夜行ふ迷ひやをーと陷こく事ふ後れ悔ーゆくまでるふーと問まるあるべ正ふ知るーるるべーとるるを母屋をうち空ゆ胆を潜ーい且感ゆ且沈吟ーと四下をえるゆ今ふまでゆ野上の主の恩義い則神仏の加護利益ゆも提ーくるゆ成絶ぶべをーるれゆも賢ゆくーるるべふゆ只何ゆも心ふ秘くい那方ざゆるり恁くと報ーるゆ日と等ゆをーるけれ外へ陳ーあるとゆ密ゆるゆを故言ゆ。惺憶ゆをーとゆの言の葉ふ敏ゆくーゆるゆも身を掩ふ夏の日蔭の月をーるゆ快

はおろか茎の枝の露欲共侶ふ。要時袖にも濡れけ。低而早飯を果し比著演ゞ又出て来る母屋と小六丸ふ對ひて曰く。きのふ亡骸を迎へよ。棺槨の准備をの形たれば既ふと整せり。因てけふ黄昏ふ安茎の式を行ふべし。墓所ハ則俺香華院ふく。遊行寺ふれば最近ろ小六又祢い茎礼の供ふ立んと反論を為ふ喪服も准備をう。然とうとて華美を盡と外見を上目とせんと。俺好ざる所なり。棺の厚ミ寺と往古ふ士庶人ふ墓碑ふ。後世士民僭上とその礼ふ違ふを巨石を畢ゞ碑銘を勒し。人工を費すも多ろ人ハ土ふ生ずゝ又土ふ帰らぬ。茎ハ朽ちその速ふ朽る成のとうとも然れ今の世ふ生れて古京返ると難ろ。俗の宜ふ従ひてみずから斟酌を施のとふる母屋も小六丸も耳を傾け感服し。苟且ろ外艱の資助ふ徳義を仰ぐのミいうで冥ろ〳〵とふより外いろ〳〵けり。然程ふ藤澤南郷の里人ハ福良長者の親族の旅宿ふ病ミ身まろ〳〵。柩を迎へく遊行寺へ今宵安茎をと偖ゞく。咱も送らん他も亦吊送せんとのぶるろ。その黄昏ふ聚ゞその一千餘人ふ及びゝ著演ゞ家の門前より陸續として間断ふ人の山做し海を做して親んとて街頭ふ立ち又施主の名ふ郷士ふ有れ寺僧も准備等閑ふ。衆人送りて寺内ふ到れば。棺を本堂ふ扛居さる。衆徒佛前ふ四維列て追薦の讀経丁寧ふ。住持の引導偈句果て棺を安ふ下ると小六丸も相随て初て墓塋ふ立ふ著演ゞ又別ふ安せたる安ふ其処ふ立ふ日後僕們ふ持し来る上ハ箇の小瓶を此彼一所ふ瘞めよとて道人們ふ指揮して且ろ一箇を安の正面ふ下さるとて義隆の首級なるべ。却又送れる五箇の小瓶とその左右ふ埋めけり。此り是問ハるゝ。船田鳥山高柳堀口江田ふる五従臣の首級なりと猜せる。當下著演ゞ茶毘の寺僧と。従ひ来る里人們をうく這瓶よ飲めハ俺年八才なりし春の比初て習せ日より五十ふ近ふ昨

今まで年来用敗した所の禿筆を以て、これを焼き、資とする。これでも曲做ある文字を寫せ。
撥遣無ければ、ものわすれ、ものいはれず、藏め置き、酒、今宵の便宜に任して、あふ痕めて筆
塚を送さんとの所為なり。むかし唐の僧懐素、その年来の敗筆を瘞めて塚を築き
し、筆塚といひしより、載く唐国史補に、任れが是筆塚、ものいふも、舊き、要あ
べやと、説示せ、道俗、一感佩して、舊法を疎して、新しく親を利するを走る、今の世の
敗る筆にも無ものを、本を忘れぬ心操、有がたくこれを連りの稱へ、己げりを、小六
九のを秘策を知れば、傍痛くいふ、人の及ばぬ著演、陰徳情義に感激して、今より
後、折々、是、恩恵を復さんとて、これ人の子と生れる甲斐あらんとぞいふ。既にして
英直の棺を這時、墓果つ、吊祭の衆人、先づ退るもあり、後れて友を俟もあり。
小六九の著演、又、倶せられ、更、蘭、比野上の宿所に還りけり。是より、小六九の母
親と共に、喪を笠竜居て、一室を出ざりの過七々日、遊行寺に詣るを著演も

亦、教を廢して、兄弟の忌服を受けり。這時、藤白棚九郎安同の鎌倉の宅地を賜り、家
作落成の日、そのそばに、移住せんとの、ものめづらしの、その身の管領、の館、舎に出仕して、稍、九日を歴る程に、鶴の由比の濱に梟れ、脇屋
義隆主従の首級、第六日及ぶ夜、一箇も送られず、紛失、そは、由縁のものに、埋めんを、竊
取る狡とふ風声あり、安同、これを、ものいふて、肚裏に、ものを、件の義隆主従の、俺忠節に、
感を、捕へ、まもるせるの、故、紛失、人の批評も、愉快、ならず、察するに、その
偷児の、竊に、新田、頁、奴、狡然、那残、黨、智術、犯人を、捕へ、
らるべきに、上の御感に預り、出頭、捉徑、便りの、密々に、その物色を、探る
程に、人の、報、當国藤澤南郷の郷士に、野上史著演と、嗅、他、名
たる、侠者に、曩に、陣殁の、髑髏、一萬級を、購集して、墓、
生平に、好く、財を、散じ、里人の、貧窮を、救ふ、大父に、新田義貞に、従ひ、兵粮を

嘗より義貞討れて世を憤り職を辞し退隠して鎌倉殿基氏義詮に出仕せざる者の子孫相
續て今の著演に至るまで最傲慢たるものなれども先代頼朝の時よりして由緒ある舊家
なるをもて斧鉞を加えられずとも遠謫もて推量るに脇屋義隆主従の首級を竊取るは
那著演が所為にあらずや敵が虚実を知るよしあらんとも賄賂を頼れて安同は欲ぶと大かる
らば退そく尋ず思ひを徼まに俺その職にあらざれば首級盗賊は著演とあなすぎその沙汰ね
ねに悠々とて許へがたく然ればとて時日を過さば他人に功を奪れて後悔其処にたつよしあらん。
所詮他が宿所に到りて威をもて權ちが実を吐くべし。その折矢庭に搦捕て鎌倉へ牽もて
ゆかば是則俺が功名の職分にあらずとて亦何人歟非とも云ふ可吟介まと肚裏に計較既に
決りければ次の日氣賀へ休息の暇を乞ひ時宜に請て十四五名の從者を前後に立馬を
すゝめて直に氣賀へいたりけるに且藤澤の御に赴き著演の宿所に呼門せて鎌倉殿
滿の御内人藤白棚九郎安同が問試むべきよしありてみづから發向あられし主人に對面

すべしとぞのたまひける。且して著演は老僕某甲をもて答るやう。偶光臨のよしを承るといへども。
著演はいぬる日より兄弟の喪に籠りてをり候へば。日もあらざれば已ことを得ず辞し奉りぬ。服闋
るの日見参に入るべからのよしいひけると云はせも果ず安同は眼を瞪らし声荒立て。そは亦自由の
至りなり。縦喪中に在りともあれ俺私の事ならぬ鎌倉殿の御用なるに出て會ざることやある。
異議に及ばず推著て項髪抓て牽出ませ。然でもあらずや辞まうすやと敦圍昇ぐ罵言攣
すが老僕は怕れて退きつ。却著演は悠々とありつる随に報しらば。著演阿容する氣色も
なく。なくらんゆゑ且客房へ案内をして茶を薦めよ。俺今出て對面すべしといふに老僕は
あくろ後て形のごとくに欵待せば安同はさもこそとやおもひけん。客房なる上座に坐を占く。
著演が出て来るを今か今歟と候程に。著演は凶服の侭にて少しも飾らず立出つ。寒
暄を舒来意を問へば安同は究竟なる從者四五名を後方におかして權威を示さ声
高やかに俺發向は別議にあらず南方の落人たる脇屋義隆主従六名が前月廿四日の

夜底倉にて誅せられ。首級を由比の濱に梟られ。第六日に及べる夜その首逸する紛
失のゆゑあり。東人は和殿の虚名を好まず。敵自方の差別なく。年来彼此陣殁せし
のみならず。髑髏を集めてこれを葬り。且私恩を施して故ある人に東西を取らせ。その身と共に父祖
三世職を辞し。御士と倡へて官府を蔑如せり。加之祖父著佐は新田義貞に従ひて愍に
微力を尽せしとふ旧縁を今に忘れず。武家に臣たる事を羞て忌憚らず。進止既にして隠れ
なくぞ御聆に達しける。これらを推よりは那義隆主従の首級を當夜窃取て葬る
欤隠せし欤。あらん疑ひは和殿にあり。討手を向らるべかりしを。前代鎌倉の幕下以降由緒ある
御士なるをもて。すべてその沙汰に及ばれず。御問に義隆主従を討捕てまゐらせよと。安同をぞ擇
出されし。則密使に立られて穿鑿の為来つる。彼盗賊は外ならで世評和殿に極りしを。
陳ずれどと免されんや。逆徒の首級を隠せるは是則逆罪なり。兵們とく著演に索を被
よと呼ぞば。従者們は阿と答て寄んとせしを。著演は声をかけ。佐と睨へて。人々疎忽をすべからず。

某何等の罪あらん。且ゆゑよしを得られよと。焦燥て安同に對ひ。趣その意を得ず。何を
證據に那首級を隠せしや。某が所為とせらるるや。譬ば義隆主従の首級を某が隠せし
とても今に至りて何の咎めを受くべき。況素より知らざる事に罪なくれんは冤屈にあらずと
のられし安同性起て。噫悍しし。盗賊なる逆徒の首を編みしものに何ぞや罪のあらざらんや。島許
あるよしと敦圍けども。著演騒がず冷笑ひ。原来御邊は武門の故実を知らざるか。威を提
んとせる欤。知ずは詳に説示さん。這方へ找みて。曾の大約敵の大将の首実検の故実あり。
又その首を軍門に梟らて日限あり。既に三日を過るときは。或は首級を本國に遣し。或は
その邊なる寺に葬るを古例とす。然るに南朝の建武三年北朝それ暦応元年夏五月摂津州湊
河の役に。楠贈正三位近衛中将正成卿一家を盡して陣殁せし時。等持院尊氏
卿の沙汰として。廼梟首三日の後これを河内へ遣して。その子正行朝臣に贈であたへ。その後
又南朝の興国元年北朝それ暦応三年閏七月二日の戦に。新田贈中納言義貞卿越前足

左 けしても降りけも
借虎威狐九郎脅野上
隔紙門小六九認兎家
右 もちや 渦のもこと
有像第五

小六九

羽の槙嶋の田畔に流矢に中て亡びぬ。足利尾張守高經は首級を京師に上せ。尊氏卿の沙汰とて則梟首三日の後又その首級を齎して越路へ遣し玉へり。高經の母は奉ずる義貞卿の軀と共に首級を同國長崎の驛に葬り。墓を建松を栽菌阿白道和尚を導師として當時名法號を源光院と称す。けふ又その本國上野の義貞卿の三男左少將義宗朝臣峯山紹碩禪師を屈請して葬礼を執行ひ更に又法名を金龍寺殿真山良悟大禪定門と号し依て金山の城中に一个寺を建立て寺號を金龍寺と呼做す。先蹤總てかくの如く敵といへども名將に匹夫にひとしくせらるゝ。非如匹夫の罪せらるゝも梟首は三日の後に亦その首の有無を問れず律に由られやうなければ義隆卿の首級とても梟首三日の内に紛失の詮議もなく既に三日を歴て有無を問ふよりむしろ又同宗の敵とふとも国賊にあらざれば必ずこれを梟首せず是その先祖を辱るを怕る故なりけり。然はあれども六日に及ぶ

金龍寺の當初上州金山城内にあり後移されて今常陸国河内郡若柴にあり

まで那主從の首級を梟てそが侭に措きしは只是有司の怠り欲先例に違ひさう。徒れば首級を隠せしめ給ふ所為なりとせらるゝも今に至りてかく外ぬを被る所為に必御邉の臆度に出さる人を誣げて栄利を謀り。似非穿鑿をもあらんぞ。倘然るに其某を鎌倉へ召よせて問せらるゝ所為に該る。何人ぞ憚ぞ密使を遣首に為たまへ。何人ぞ憚ぞ密使を遣首に為たまへ。還しもせず異説に及び共侶に鎌倉へ參上して訟はるゝ虚実を糾さず快ふ思ふ。られと席を拍膝を找めて問かへたは義理明辨に厚しめらるゝ安同に昔碩を舐る啞児の如くそれをとぞ面赧やうに眼を睜れど一句も出ず怯むを紛らを苦笑ひ一く刀を引提て身を起て口功者ぞ長談ヨヌ辯火をとりて水に似て做る。絆の趣恁々と宣へば兵仗本と呼卒なる。席薦障も暴ぞ出ず。外面は一七出さずを著演に送りもせず冷笑ひて袖ぶち拂ふて躰て奥へ退けり。

第四回　陰徳老境ニ入テ奴婢ヲ得タリ　陽ト鬬鷄ニ縁テ主僕ヲ倡フ

恁リ一程ニ小六丸モ母親母屋モ奥ニテ客房ノ方ニ當テ猛ク騒ヒヤリケルヲ。訝リテ奴婢ニ向ヒテ問フ。那藤白安同ガ密使ト唱ヘテ來ルトヤラン。胸ノ安カラネバ。その次の間ヘ出近ツキ。親子弁一竊ヤセーガ安同ガ申ツルヤモ又著演ガ仕合ナル。一五一十の詳ニ知られてこそ愉快ク思ふのなれ。後ニ出ずりのあるぞと有數ニ心ヤセれども。著演ハ後々まで母子ニ對ひて安同ガ來ルエセ者のかざれ。言の便のなり給ふ。母屋ハ申ルヲ小六丸モ亦著演ニ件のよりと同ジ果ては已ニけり。まづハあれども小六丸モ。あの日藤白安同ガ面を初テ認リークルヲ。數ヲまくほーうに入る心ざしハ惱リーかどを。雖言ハ主従ヨリ人數ヲ俺小腕をもて敷ニ毛を吹ル疵と求めるべ。禍主人ハ及ブ難ーけニ安同ガ數ヲとも老體ひとりのるれば死まるあ程あるべ。且く時を俟ハ不如ト思ひ

鎌倉大草紙ハ相模守道法名ハ大ト号ス是則義隆ノ事

黄泉ノ婦人ハ絶好ノ美人ト云ハ故吉又

一つ胸を捺リて。母親母屋と共ニ佑ニ出ずるを間窺テ。そが俟奥ヘ退ル。童子ハ思慮を逞ーけれ。却説三伏の夏過て。秋の初風立ーて。俟とハ英直ガ卒実忌を迎ヘけ。あの日野上著演ハ母屋小六丸を推テ。遊行寺ニ詣テ。丁寧ニ好事を執行ー衆徒ニ布施ヒ。且英直の墓碑を建及義隆主従の首級を瘞テ屠所ニも。五層の石塔婆を造立テ。羊モ阜塔の四个字を鐫テ。羊阜の二字を義隆の字の半體ヒ有けを。親るのるべ。これを曉ヒ沼ラ。筆塚ヲリと必ひけ。そが中ニ小六丸ハ。筆塚ヲ見ルと知れども。羊阜の二字をもまぐ悟ラ。後ニ至テ学問ハ進む。随意發明ーとある後漢の甘奈邑ガ曹娥の古碑ニ題ーたる黄絹幼婦外甥女韭臼の隠語ニ類せる。俺楊脩の才ありけれバ。知ルと遅ーと必ひけ。是ハ後話ヒ。そを古又の次第ニ識ルを。法延果ーその夜女著演ハ必ふ。晩稲ニ示ーく側ニ侍ラせ。そが俟母屋と小六丸を招ニ近つけて。枝ニ。知らるべく俺ハ夫婦を過

黄泉ノ婦人ハ絶好ノ美人ト云ハ故吉又

世又くさの年来子どもひとりもあらざれば人と憂ひく必ひとり人と之後を第一の不孝と祖先の祀を絶所以なり今ふ必ひとりけるくも個義任を汲てもり宿望を成就を死ちとふとも後安りあの欲ひを知るべを今より小六を養嗣として俺荘園を譲ふべ然れどとく野上氏を冒して実の親の祀を絶せんとのあらざ総俺養嗣ふ為ともその本姓なる錦氏を告く両家をひとふ合せ野上氏累世の諸灵を祔祭せられるべそを莫大の幸ひあの義を兼引ぬるしとのへば晩稲も共侶ふ世ま人の妻とーく子るたい七去のひとつとのへば十稔以来幾遍う側室を薦め作りーふ色を好まね心ら用ひられれば術もなく心苦しく必ひふ為ふ来ましたの家督を續せんとある俺伎のう間これふ優なるとあらんや俺身過世の罪障も見よりあらざく軽うるらば後安く作るべ必る推辞ぬひそとられて敬遠く小六九ハ母の應のおびつるも且く口を鉗くう母屋ハこれをうちやくるるよりもあた日蔭の這児を然まそふ必ひれまるるい

願ふてもるくあるべ洪福で作れども尚老朽るれ夫婦るーれば人の後とそもお子逆れ生れあのぬとのあふ可又十稔も笠寺ぬひても竟ふあん嗣のるたるらべその折ふあそこもかくも仰ふ随ひ作りて自今ハ尚早るふふ且く緩ーぬひれと推辞むを著演ぬあ謙退辞譲ハ人ふとるべ。あの義ハ今宵必ひ起ーと云云とのふふあーまだのあるに俺既ふ館生の柩ふ對ひく拒言ーるもあふそ。然とも俺嗣ふせーるを戰ひのふ欲ハくふそ。と辭せる者く怨ぎれば母屋の困ーと笠合難ーを。小六九ハ然もーそと必ひ汲ーく小麻を找を主人夫婦ふ對ひくふ。尚総角るる刃を入ーてそ俺ハで恁ハで打出の杭ふ似ーてんやうを鳴呼ぎまあく必ハれまるる知らぎ作れと言ーをりけーふ重恩の厚ひ作ふ身ハ舊れハ縦火を焼を水を汲む奴婢ふせられて使るとも素より願ふ所ふ作るを況あん嗣ふせんとあふ這身の福を必ハぎふ何とう戰ふく推辞むべ然ぎれ人の子を挙るふ。と避ぬあるのを五十ふ足らで人の子を養ひあふ早らぎや且俺们ハ世ふ憚るーさへあふを敷ふ續ぎが名家れ

瑕瑾ゐるゝん母の辞退いなの故のことのひも果ぬゐ著演を頭を左右ゐふち掉くそも亦愚意と組語をろ。在甘魚曽国の公冶長の縲絏の中ゐ在りりを孔子ゐそをーも敷ひゐいぎ。その罪ゐあらぎとく。その兄の子を以妻せ王ひーとゐゐ木ーゝ文おゝ和殿母子世ゐ憚るも時運のあゝらまるのこそ。その罪ゐあらぎゐ俺類おく嗣ゐせぎゝんや然ーもあの義を嫌れぎゐ目今応を聴まほー。推辞い要るをとるゝぎゐ。連りゐ譴ゝ已ざりけれぞ。母屋ゐけらこ小六九も。竟ゐ脱るゝ王をゐぎ。僅ゐその意ゐ後ひゝを著演斜るゝ敬びて。小人ゐけゝりゝ。小六九ゐ俺嗣ゐ忌関の日ゐ平ゝ。あの敬びを表をべー既ゐ郷士の嗣ゐるりていい九と咽ぶと相応ーゆゝぎ。小六九の丸を除ぎく。餘小六とゐいんそよけれ九い尖人の謙稱ゐるみづゝ。不才といるゝぎー。才をかぎと訓ゐゐ對へく。却九とゐいるゝおの義をまろゐめくゝと諭せゞ母屋も小六九も。ゐふま優る著演の博学ヨヲオゐ感服おく。ゐも亦その意ゐ随ひけり。却説その冬著演を。小六ゐ己忌の関ー比吉日をトを盃

おく。小六と父子の義を結び又親戚と里人ゐより生置酒延會ーゝ。敬びを盡ーけり。己れよりーを著演い小六ゐ為ゐ師を擇ぶく。文を学ー武を習まるゐ著佐の時よりゝ。家ゐ蔵書のヨヲろけれゐ小六を讀書の初より。日毎ゐ数千言を唸誦ーゝ。そのの義理ゐ通達ーをく切瑳琢磨ーゝ。螢雪の窓ゐ小夜の深るを數ゐ。武芸ゐ亦世ゐ名高ゐ上泉武者助金剌秀武ゐ。京師より来く。鎌倉ゐ僑居せーゐ師とー随ひ。その餘陸水拳法。坐駕ゐ相撲の技まで。その師ゐ就く悉習得ぎとゐふとるけるゐ著演いよく敬び。恩愛実子ゐ異るらぎ又只ゐ著演のみなるゝ。晩稲も小六ゐ慈愛こ且母屋ゐも隔るく。相親ーて妹のごく。姉ゐも優て憑ーく。萬事ゐ心つけられーを母屋ゐるゐも謙遜りゝ。日々ゐ女婢們と共侶ゐ立働ぎとゐふとるく。小六も亦実母養父母の分別せぎ。ゐろを用ひ孝を盡ーく。亦ゐ己忌ゐ答んと思ひぎる日もゐろけり。看官ゐゐろせよ。小六ゐ文学武芸を習ひて上達せーゐ年を累ねく。是より後ゐるれ

どあ。併べてゐ識ものゝ。間話休題。現陰徳を陽報あり。積善の家餘慶あるにや
あるぞその次の年の春より晩稲は月水をとゞめ。漸々に身おもくなりて。冬に至りて安ら
かに男児を産けり。時に著演は五十歳。晩稲は四十三歳の。初産なるに恙もなく。母
も子さへ快肥立て。乳も亦匱からざりけれバ。園宅の歓びいふべうもあらず。鄰家の驚
き稱へて。年来作善陰徳の報ひなるべしと。いはぬもなく。當時の奇談になりぬ。恁而
五十日百日の産室養ひ果し。此母屋ハ小六と商量して。有一日野上夫婦を招き
饗して。小六を養嗣にせんと宣せし。折辞ひまうして。世に人の子を挙るに遅速あり
あれバ姑く等せ給ひねと。まうせしハけふのうへにて。人の及ばぬ善根を。年来植させ給ふ
功徳蘊りて。八十萬の神の恵ませ給ひぬるぞめでたけれ。男児を安らかに挙給ひにければ
又六の家督を嗣しめんが順なり。願ふハ小六を初のごとく。復侄品にかへして。母子共
心を休らへ給へ。奴家が心ひとつにあらで。小六も只顧願ひ侍りといふを。著演ハきゝて。も

声を高め立て。そを又沙汰の限り。俺年五十に及びしも。今に至りて産し子の成長を
まつまでの餘命あらんや。縦命の長くとも。それ迄死ざるべきかは。既に俺庄園を總て小
六に譲んと約束せしを。変易て今から何人か與ふべき。生れし赤子ハ。いつでもあれ小
六が弟なれバ。成長らバ家僕にして。家支の次貝助に代らせんも。是因てその乳名を奴
婢之助と喚べしと宣ひけれど。すぐに告げし事情を知られぬなるらん。母屋なれバこそと教
團ハ晩稲はさすそと慰めて。恁宜には理り過世すくて嗣なきもの。人の子を養へど。その
氣を引て邂逅に子を生むものもありといふに。世話にもかへバ是も亦據あり。己ぞ待るなれ
倘果して然らんには。小六を養嗣にせしより。此兒の生れたりけんを然とみれバ約束を
易て小六を今から又義侄にせられんや。俗に則ち見ハ水の上なる泡にひとしといふなれバ
這兒がよくも育ん歟。そも亦料りがたし。殊に久後さけて憑を失ふべき悔しき事も
云云と辞ませ。俺夫の意にあらざりしといへバ。著演笑しげに彼少なる。母屋刀祢

晩稲が胸目も俺と同じ。俺が心は巌の如し。左でも右でも轉べからず。これらのよしを小六にも說
身詳に僭示して。然る妄念を絶せよ。復あらば必怨んとおもふべしと教言やく。兼引
肯くもあらばこそ。お母屋は回き辞もなく。言葉して退きて。小六によしを報知せ大人も
亦母刀自も箇様々々に宜へり。今ゆらかにせん為なりしと。心に小六を嗟嘆して。野上氏を
目らずとても身に一分の功もなくて。人の家督を續んるは素より願ふ所に侍らば
況て今は養父母に正しき実子あるものを。猶且その意に従はば後に至て人必奪ひけり。
自然べく禍も又是より發らん。胸安からぬわざなれども。事情を按ずるに目今急に這
議に及ばず。怨を受て洪恩を空に做すことありやせん。五年十年候とても俺们が
這志の果しがたきわざなれば。黙して折を候んのみと。母を母屋は感嘆して親聴
其志価の了簡。そこに優るべき。然ばとて養父母を隔て疎畧にあらずと
こころ付すぞ頷きて。そもこころ得て侍るかし。須弥より高き恩人を。親にせずして子にあら

ずとも。いかでか疎畧に思ふべき。穴を鑿ち骨を折ても報んとこそ思ひ侍れ。その義ならば
安かるべしと。いかにも母屋をいよく感して。耳に果ら亦後を又這一議をいはずども。
野上の赤子に心を盡して。介抱一日も懈らず。愛する事その大方ならぬを著演は
屡妹にもて總て小六と同うせず。繦褓も綿布のまゝふして。奴婢之助とぞ名づけける。
然程に母屋は是裏に其直の。病中死後の苦労患難。今は野上の資助によるぞ。
世渡りやすきに似たれども。然とて人に懸りて在れば胸苦しきまゝにあらざる。
所以か月毎に積みに痞に用られて。遂に三ヌ病になりしかば血色も初に似ず。全身
いたく骨立たるを。小六は憂ひに思ひて連てに諌めて餌薬を薦め野上夫
婦も幾遍となく醫師にせんといひしかど病臥までにあらざれば母屋は辞して従はず。
獨心に思ひけり。亡夫の遺言に郎君のおん年の十五六になりなん時。おん素生を
告まゐらせて。先君より預りまゐらせし三種を遞与しまゐらせよとありけれども其折を

侯て黙止たりけるとも。俺身箇様ハヨス病ハ[illegible]て。猛ハ病痾ハ閑らまこと。のものハ
まぞそゞ侯ハ息絶ることありもせず。何人ゝ亦俺身ハ代て。綽恁々と郎君ハ報
ゆゑらまこのあらんや。然ハ折の用心ハ書つけ置ハ優とす。非如文辭ハ疎く
とも良人ハらいまこ趣を識さゞ後悔ることなべしと尋思とて密々ハ件の支の顛
末を幾日ゆゑ[illegible]つけて重封ハ人。英直ハ送ーたこ三種と共ハ日ごろ人ハ
ゆけさゞ。衣櫃の底ハ秘藏ゆく。鍵さへ青ハ放さゞ。知るものたえくなるけゞ。恁
まで用心ゆくとーを。小六ゞ年尚十二三ゑハ比なりけるゞ。益ハも立さゞ。母屋ゞ病着
初ハかくまで癒るとあれゆるれども二日と病臥をとるく。又四五年を経ハけまゞ小六ゝ
既ハ十六歳著演ゞ実子奴婢之助ハ七才ゆをなるハけこハ時ハ応永十七年母屋ハ
久しく侯も不樂こハ稍ゝの折ハ[illegible]ーハ[illegible]で今茲ゆ小六殿ハ亡夫の送言を報
まゆらせんと思ひたく去歳より便宜をとろくけーハ人ハ[illegible]秘言こハを小六ゝ文学

武藝の為ハ日ごと師の許ゆゞるとゝ。偶可宿所ハ在ハ折ゝ左ハも右ハも外見ま
くく秘支長談ゆゝ便を[illegible]ハ障ハ[illegible]果さゞ。今茲ハ春過ぎ夏去りて
秋涼月ハ[illegible]ハ休題復表肇話。新田左少将貞方主ハ曩ハ陸奥を
落ちゆ[illegible]と。義隆朝臣と立別れて。越路を投て起行たり。且く北國ハ世を潛
ひて再時運を揣ゆハ越後ハ新田累世の由縁ハ地方ハて且貞方主の伯
父ゆけ。従四位下春宮亮義顕朝臣の嫡子ハ建武元年ハ任せられて當時越
後守ゆ。又貞方主も南朝の建徳二年ハ越後守ハ任せられ尓後大授二年ハ
従四位下左近衛の少将ハるゝ。此彼前後の任國ゆーハ然でもゆゝハ舊
族ヨスゆ。這我ハよりゝ勇士を甚ハ[illegible]更ハ又義旗を揚るよりゝ。尋思を
ゆ。躰ゝ越後ハ赴て且く時を俟ゆ。人倫仁義疎れ
何人ゝ舊縁を思ひて[illegible]閑居徒ハ年を累ゆて[illegible]作たるもなく。剰自方ハ反忠ゆの

春江堂印刷

春江堂印刷

あるさく貞方當國に在るを領主上杉憲定の執事なる長尾景賢に報じ景賢馳く大軍を率て推寄せ攻るに雪時に防戦ふ能はず貞方を士卒ヨリくもあるれば名ある家臣戦没し妻子眷屬四落八散に生死も知らず敵に敗されて残燼ゆゑび燃るに由る然けれども貞方主は辛く重囲を殺脱し當国弥彦山に登り且く山居あるに程に料らず異人に邂逅して仙書一巻を授けられ且隠形五遁の内中水火二遁の仙術をその折伝授せられけれ是に貞方は食ざれども饑ずして山に在ること一稔可に後越後を立去て本国に帰り上野に赴き深く潜び御座せしに応永十年の夏四月下旬脇屋右少将義隆の相模に底倉に敗られ逃れ以下京鎌倉の下知として貞方の隠亡を厳に索ねとく州郡に徇知せる骨相書をそせられば又上野に落着ゆさくくと遽く立去る信濃甲斐に由縁許或は一年或は半年潜び

光閃を送りのぶる其居も討兵を蒐られて危殆に屋を焼て那仙術の奇特なる火に値へば火に隠れ水に遇へば水に隠れ虎口を脱れ是より後宿所を定めず東八ヶ国を徧歴あさ。るは會私旨の恥をも雪めんと欲すれども這時なれども従ひまろうて忠義の志相ならびける譜第恩顧の勇臣に畑六郎二時種とふもの有り他に新田の四天王隨一人と呼えるる畑六郎左衛門尉時能が孫なる武藝に勇敢に大父時能に劣るとなく筋力飽まで悍くして千鈞の弩を揚げるあるに貞方主と共侶に幾遍となく危難を脱まさ。主従二人に過ぎるまでも影の肢體に従ひ奴正首に仕へ奴然が陸奥に落ゆ一より十稔あまりの光閃を経て応永十七年の夏の比より下総なる千葉介兼胤が鎌倉の管領を窺ふ然るより隠謀の企ありとふ世の風声の彼此ゆえに貞方主従相然びく千葉に下総の舊家に千葉葛飯印幡數郡の領主なる兵のこれのとふあるぞと相馬武石大須賀国分原馬加等の氏族ヨリ他今謀叛の旗を揚げ

千葉の城ふ盾篭らば一朝ゆへ落べくもなし。且その先代と葉介宗胤い俺先大父贈中納言剛毅ふ従ひまつりて三井寺合戦の折陣没しなり。宗胤の父自胤い北国落まで自方の一ふ先大父の亡のひ一後ハ引返しと尊氏ふ従ひふ。然れ宗胤の嫡子ま胤自ハ始終忠義の志撓まず。征西将軍の宮筑紫へ御下向の砌供奉一まつりて大隅守ふ任せられ肥前国を領し。是ものの舊紀由縁もあれば窃ふ那地へ赴く。その為体を聞て世の風声の虚実を知るべく其処ふ便宜をなるとあらん。然いとく猛可ふ思ひ起ち行装を整て笠ふくしと立出ゆへ畑六郎二時種ハ奴隷の姿ふ打扮て裳を引折脚絆を穿一刀を腰ふしと行果を駝ひ。外見を潜ぶ主従二人後ふ従ひ先ふ立て下総と投て急ぐ程ふ。その年漆月の下浣ふ千葉の城下ふ程遠き福草村まで来ゆひり。畢竟自方主這頭を過りゆふ折又甚麽なる話説りあるぞ。次の巻ふ解分ふを聴ねかし。

開巻驚奇俠客傳第一集巻之二終